

る能はず、之を補ふに化學者の所謂(Vortex motion)を以てするも、未だ盡さざる所あり、心理學者の研究によるも、ウルリツチは腦髓の機能なくば精神作用は起らざるも、腦髓が心作用の唯一の原因なりとは俄かに斷言すべからずとなし、更に「Eib」を心の基礎とするも、これ已に抽象的のものに屬し、或ひは又生物學者の説によりて細胞の原形質(Protoplasma)を調ぶるも、未だ充分に説明せられざるものあるは事實なり、さらばとて、直に人間は無力なり、佛陀の力によらざれば解説する能はずとはいふ可らず、或は宇宙の奥底は其始めしかく精緻靈妙の構成には非ずして、電氣の如きも相反する二性は始めより有りしならん、而もこれを利用して燈となし、は、これ人智の産物ならざる可からず。

かく述べ來れば、予は他迄經驗主義なるが如くならんも、予は靈魂不滅を科學の上より否定せんとするものにもあらず、信仰を無視して冷靜なる理屈に安んずるものにもあらず、期する處は、經驗によりて説明せらるゝ限りは科學智に求め、之を補ふに信仰を以てし、迷信に陥ることなく、理性のみに安んぜず、深

厚にして温かき情を養ひ、以て健全なる信仰の上に立たんとするにあり、故に人の批評に耳を傾け、世の進化、人文の發展に目を注ぎ、常に自己の心田を開拓し、進む處までは進まんとするが故に、信仰も亦大に變化せざるを得ず、所謂大悟徹底の期は、棺に入らん時にあらんも知る可らず、長く君を煩はしたる罪は深く謝する所、予が靈魂もし靈あらば、君の枕邊に立つて謝辭を述べ、時あるべし。

著者いふ、この一篇は、數年前長友北村君と、ある誌上に於て、意見を交換せしものにかゝり、固より舊稿に屬すれども、靈魂問題研究の一助たるべきを以てこゝに附記することとせり。

我邦上古の靈魂説

一

靈魂は、我が國上古の語には、ミタマ、また、タマといひ、古史多くは、靈の字、また御魂の字をあてたり。和名抄には、靈、日本紀云、美太萬、一云、美加介、又用、魂、魄、二字とあり。而して、靈魂に關するもの、始めて古史に見えしは、伊邪那美神の崩御の傳説なり。古事記に記する所によれば、

故伊邪那美神者、因生火神、遂神避坐也。

於是、欲相見其妹伊邪那美命、追往黄泉國、爾自殿騰戶出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟、故可還、爾伊邪那

美命答曰、悔哉不速來、吾者爲黄泉戶喫、然愛我那勢命、入來坐之事、恐故欲還、且具與黄泉神相論、莫視我、如此白而還入其殿內之間、甚久難侍。

(下略)

(古事記)

靈魂は、死後肉體を離れ黄泉國に往く。こゝは暗き所にして、下方にあり。ま

た、この現世との境に泉津平坂あり。一たびこの黄泉國の竈にて炊きたるものを食へば、再び現世に歸ること能はずとせるものの如し。

本居宣長、これを解説して、『黄泉國とは、豫美は、死にし人の往いて居る國なり。生返るをよみがへるといふも黄泉より返るなり。下文に、『燭一火』とあれば、暗處と見ゆ。又た下方にある國なりけり。此黄泉の事、外國より來つる儒佛の書に、人の生死の理をとりくりに云ることどもを聞き馴れたる後世の人は、佛にまれ、儒にまれ、己が心の引々に、強ひて、其方に思ひ寄すめれど、皆ひかごとなり。(中略)たゞ死人の往きて住む國と意得べし。(或人間云、死にて夜見國にまかるは、此身ながら往くか。はた魂のみ往くか。答ふ、この身はなきからとなりて、しるく顯國に留在れば、夜見國には魂のゆくなるべし。『黄泉戸喫』とは、黄泉國の竈にて煮炊たるものを食ふをいふなり。』といへり。これによりて、彼の佛説などの輪廻轉生の思想と異なるものあるを知るべく、また以つて、國民が清淨を貴び、死を以つて不淨なるものとせる性情の古くより存せるを窺ふに足るべし。

そもく、靈魂はその本體、奇しく、靈なるものにして、ほどほどに、尊卑大小の差異あり。神の「ミタマ」も凡人の「タマ」も、その質は同じものなれども、品位に差異あり。これ神と人との別を生ずる所以なり。また、神にても、尊卑大小あり。これ「ミタマ」の品位によるものなり。而して、この靈は、死後、夜見國に去るといへども、なほ、現世にも留まりて禍福をなす。但し、その神、人の尊卑、強弱などによりて、この世に魂ののこる程度に差異あり。また、荒御魂、和御魂あり。荒御魂とは、強暴なるものにして、和御魂とは、和柔なるものなり。神にしても、人にして、和らぎたる性質のものと、あら／＼しきものとの差異あるは、全くこの荒御魂と和御魂との作用に基くものなり。和御魂は、また、その徳と用とによりて、幸御魂、奇御魂といふことあり。これらの關係については、本店宣長の説によれば、

さて、神の御靈を、和御魂、荒御魂の二つに對へ言ふは、たゞ、その徳用をいふ名にこそあれ。全體の御靈は、御靈にして、必ずしも、この二つに分れたる外、無きに非らず。そは、まづ、一の火あらむに、其を分け取りて、燭と薪とに著くれ

ば、燭にも薪にも移りて燃ゆれども、本の火も亦滅ゆることなく、減ることなくして、有りしまゝなる如く、全體の御靈は、本の火にして、和御魂、荒御魂は、燭と薪とに移し取りたる火の如し。

(古事記傳三十一)

さて、幸魂、奇魂は、共に和魂の名にて、幸、奇とは、その徳用を云ふなり。二魂には非らず。(中略)さて、幸魂とは私記に、是左支久阿良之无留魂也と云ひて、字の如く、その身を守りて、幸あらするゆゑの名なり。奇魂も字の如く、奇靈徳を以つて、萬事を知識辨別へて、種々の事業を成さしむる故の名なり。

(古事記傳十三)

靈魂は一なれども、その徳用によりて、荒御魂と和御魂とに分つことを得べく、また、和御魂をば、更にその徳用によりて、幸御魂、奇御魂など稱することあり。また、この靈魂は分離すること、薪に火を移すが如く、而も、之がために本の御靈は増減するものに非らずとせるが如し。

二

古史に記する所によれば、書紀大國主神の條には、

附錄 我邦上古の靈魂觀
干時神光照海、忽然有浮來者、曰如吾不在者、汝何能平此國乎。由吾在故、汝得建其大造之績矣。是時大日貴神問曰、然則汝是誰耶。對曰、吾是汝之幸魂奇魂也。云々
(書紀)

とあり。又神功皇后征韓の條には、
既而神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒、而導師船とあり。ルゾオン氏は之を解釋して、「一神靈が數多の異種の神靈に分離することを得、即ち荒魂和魂幸魂は全體の魂より更に別種のものにして、是等は總て四魂となり得、これフレーザ河畔の北米印度人の四魂分離の信仰に似たり。是等の外に、また別に側魂なる分離的の神靈が獨立に存在するあり云々」といへり。こゝに神靈といへるは、一面神にして、やがてまた靈魂と見るべきなり。氏がこの説は、固より古事記傳等の説に據る所多く、神靈分離の狀を火を分かつに例へしが如き、その著しきを認むべく、全體に於いては、蓋し略肯綮を得たるものといふべし。
但し四魂とせるは、固より誤まれる解釋なり。

更に靈魂が動物に化すとせることは、

於是坐倭后等及御子等諸、下到而作御陵、即旬、旬廻其地之那豆岐田而哭爲歌曰、(中略)是化入尋白智鳥、翔天而向濱飛行。云々
(古事記)

時日本武尊、化白鳥、從陵出之、指倭國而飛之云々
(書紀)
掘田道墓則有大蛇、發瞑目自墓出、以昨蝦夷云々、時人云、田道雖已亡、遂報讎、何死人之無知耶。

差白鳥陵守等、充役丁、時天皇臨干役所、爰陵守目杵忽化白鹿、以走云々(書紀)
これらの例によりて推すことを得べきなり。これを以つて佛教の輪廻轉生の説と同一なりとするものありと雖も、彼と是とは、少しくその思想を異にし、佛教の説の如く、現世の業によりて種々の形に轉生するといへる教義的のものに非ずして、只鳥獸に化することありとせるのみなることは注意すべき所なり。

その他、靈魂不滅の信仰より、その靈魂を祭ること、種々の器物を死體とともに埋めしこと、また殉死の風ありしことは、多くの事實によりて明かなる所なれ

附録 我邦上古の靈魂説
ば、こゝに一々その例證を示さざるべし。

三

以上は我が國上代に於ける靈魂思想の大概にして、未だ外來思想の影響を受くること少なかりし時代の信仰なり。降りて奈良朝に及びては、儒佛兩教の渡來ありて、これがために、靈魂に關する思想も亦變化を呈せり。今この時代に於ける思想を、萬葉集中に現はれしものによりて分類する時は次の如し。

一 靈魂は氣息なりとするもの

天平五年笠朝臣金村贈入唐使歌一首

玉手次、不懸時無氣緒爾、吾念公者云々

この意は、命のかぎり思ふ云々といへるにて、「イキノヲ」は生命をいふ。すべて物を續けて絶えざらしむる物を「ヲ」といひ、命も生きの絶えざる間をいふものなればなるべし。氣は借字にて、生きの緒の意にて、十一卷に生緒と書けるや正字ならん。(古義)といへるは如何あらん。集中多くは氣緒と書けるは注意すべき所なり。生きてある間は、氣息のある間にして、生けるは靈

魂のあるによるとせるは、上古時代の思想なれば、靈魂、生命、氣息を同一のものとするを知る。靈魂が氣息に宿るとせるは、印度吠陀時代の思想にも見るべく、靈魂が氣息の如きものにして、眼には見るべきも、手に觸るゝこと能はざるものとせるは、希臘古代の思想にも存せし所なり。なほ、靈魂が生命と同一の意義を有するに至れるは、印度吠檀多にて、精神に伴隨する主要呼吸が、優波尼沙土にて、口風の義なりしを、生命の義とするに至れるが如きその類例なり。

二 靈魂は靈能ある物質的のものなりとするもの

怕物歌

三首の中

人魂乃佐青有公之、但獨相有之、雨夜葉、非左所思念。

本居宣長は、人魂は「さあ」の枕詞にして、色青き人にあひて怖ろしかりしをいへるかとしたり。古義には、人魂は、死人の魂にして、世にいふ幽靈なり。契沖は、人のたましひの、火のやうにて、とぶをいふなりといへるが、今は、それには限るべからずとて、更科日記など引けり。

附 録 我邦上古の靈魂觀

此曉に、いみじくもほきなる人たまのたちて、京さまへなむきぬるとかたれど云々 (寛科日記)

和訓栞に、人魂を解して次の如くいへり。

人魂也、本草に見ゆ。人縊死則魂入於地、墮即掘之、狀如黹炭ともいへり。明日記に、「正治二年三月五日夜前北壺吳竹邊有人魂飛去」と見ゆ。飛ぶ時に、地より三四丈を過ぎず。落ちて、こんにやく玉の如く、地下黄泉に入るといひ、或ひは落つる所に黒色小蟲多しともいへり。拾芥抄上に、人魂を見たる時には、

玉は見つ、主は誰ともしらねども、結びとめし、したかへのつま。

この歌を誦し、著る所の衣の妻を結ぶといへり。

要するに、「たま」とは心のはたらきを司る靈能なる心の主にして、物質的にして身を離れては遊飛するものとせるなり。

三 靈魂は神より受くる所とするもの

寄物陳思

千早振神持在命 誰爲長欲爲

略解に、神のみ心のまゝなる命といふ意かとせり。人の靈魂は神より受く

る所のものにして、従つて生命は神の意のまゝなりとの意なるべし。

父母賀成乃付爾著向弟乃命者、朝露乃銷易杵壽神之共、荒競不勝而云々

神のむだあらそひかねては、人のこの世にある間は、死するも生くるも、神のみ心のまゝなれば、神のみ心にてそむくこと能はずといへるなり。古義に靈平神とは、神の幸ひ佐け保ちますによりて、靈を人の身體にやどして、その中、神の御保助の厚き人は、長く靈を持ち、神の御守護の薄き人は、天く靈を失ふことにて、靈散離せばやがて、身體は滅亡すといへり。

四 靈魂は不滅なりとするもの

一 死して天上に登るとするもの

天智天皇崩時婦人作歌

空蟬師神爾不勝者云々

神にたへねばといへるは、天皇は神となりて、天津宮にましますべといふ意

なり。即ち死後天上に登るとせるなり。

日並皇子殞宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌
天原石門乎開神上座奴云々

天の原の岩戸を押し開きて、天上に登り給へりといふなり。

大津皇子被死之時、磐余池波流涕御作歌
百傳盤余池爾鳴鴨乎、今日耳見哉、雲隱去牟、

死して天上に上る故に雲隱とはいへり。

口死して黄泉に行くとするもの

見菟原處女墓歌

雖生、應合有哉、安申呂、黄泉爾將侍跡云々

死して黄泉に行きて待たんといへるなり。

戀男子名古日反歌

和可家禮婆道行之良士、末比波世武之多敵、乃使於比豆登使保良世。

山上憶良

幼稚なれば、道や迷はん。黄泉の使よ、物捧げん、背に負ひて往けよといへる

なり。亡き子を思ふ情、言外にあふれたり。この長歌には、天地の神に祈り云々とある處は、我が國古代の思想なるが如く思はるれども、次の歌に「布施於吉豆」などありて、佛に乞ひのむものとせるのみならず、この歌の道に迷へるといへるは、佛家のいふ所の冥土の道とも聞こゆれば、佛教思想の影響せるものと見るべきか。

五靈魂は輪廻轉生すとなすもの

大宰帥大伴卿讚酒歌 十三首の中

今代爾之樂有者、來生者、虫爾鳥爾毛、吾羽成奈武。

現世に於いて楽しくあらむには、來世には、虫鳥に生るとも厭はじといへるにて、即ち靈魂は、輪廻轉生すとの思想ありしを知るべし。こは佛教思想なること明かなり。

六靈魂は滅すとなすもの

挽歌

世間者、信二代者、不往有之、過妹爾不相念者。

一たび死すれば二たび遇はざるを思へば、來世はなきが如しといへるなり。

七靈魂中有にありとするもの

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌

家來而吾屋乎見者玉床之外向來妹木枕。
羽易の山より家に歸り來て見れば、空しき床に枕はかたへに打ちやられ有りといへるにて、當時人死して一週日の間は、床をも其儘になし置きしなり。これ佛教に人死して七日の間は、靈魂中有にありといへるより來れるものなるべし。俱舍論九卷、分別世品第三に

同淨天眼見。業通疾具根。無對不可轉。食香非久住。

倒心趣欲境。濕化染香處。天首上三橫。地獄頭歸下。

の頤を説ける中に、尊者無友言。此極多七日、若生總未合、便數死數生、有餘師言。極七七日云々とあり。

八死者の靈に逢はんことを願へるもの

田口廣麻呂死之時、刑部垂麻呂作歌

百不足、八十隅坂爾、手向爲者、過去人爾、蓋相牟鴨。

死したる跡を慕ひて、黃泉に行く道すがらの八十くま毎に手向して祈りゆかば、逢ふこともやあらんかといへるなり。伊邪那伎命の黃泉にしたひ幸して、女神に逢ひ給ひし事をもとにして詠めるなりといふ。

九言葉に靈ありとするもの

寄物陳思

事靈八十衛夕占問占正謂妹相依。

人の言葉には、神の御靈のますが故に、ことだまとは、いへるなり。これらの中には、上代より傳來の思想あり、また、外來思想の影響を受けしものあり。なほ、事の序にて、古義に見ゆる次の解説を附記すべし。

山上憶良追加一首

鳥翔成有我欲比管、見良目杼母、人社不知松者、知良武。

皇子の御魂は、飛鳥の如く天がけりて見給ふらめど、人の目に見えず。されど松こそは知るならんといへるなり。

履仲帝紀五年九月乙酉癸卯、有如風之聲呼于大虛曰、鳥往來、羽田之汝妹者、羽狹丹葬立往。

源氏物語水脈津鏡に、よりみだれ、ひまなき空になき人のあまがけるらむやとぞかなしき。

人の現在を過ぎて、その神魂はいかになり行くかといふに、既に神代に伊邪那美神神遊坐て、黄泉國にいてませるよし記されたれど、人の死して魂の黄泉に往しといふことたしかなる事實も古傳に見えず。此集九卷哀弟死去作歌には、黄泉乃界云々、又見菟原處女墓歌に、黄泉爾待跡云々などは、佛籍に所謂那落の説を傳會したるものなり。

特に戀男子名古日歌に、之多敵の使といへるは冥途の使なり。布施於吉豆、吾波許比能武阿射無加受、多太爾串去豆、阿麻治思良之米。

阿麻治は六道の一なる天上をいへるなり。(中略)蓋し、魂は夫に歸き、屍は地に葬ると思はるゝよし、かたゞあり。唐にも、及其死也、形體則降、魂氣則上、是謂天望而地藏也といへり。(中略)されど、實は陵墓は、その神魂を其處に

永く留めんとて構へたる事倭建命のことを思ひ合せても曉るべし。古事記中卷御魂化入尋白知鳥翔天而向濱飛行云々留河内國之志幾故於其地作御陵鎮坐也云々又陵墓のさだなくて、魂の天上に歸きたることのみを云へるは、日並皇子尊殯宮之時人麻呂作歌に、神上上坐奴といへる、弓削皇子薨時、東人作歌に、久堅乃天宮爾神隨神等座者、又左大臣長屋王賜死之後、倉橋部女王作歌に、雲隱座とあるも、魂の天に上れるをいへる也。天智帝崩御時、青旗乃木旗云々など皇列の上のみ云ひて、天に上るといふことを凡人には、過消去などいひて、天にあがるよしひたるなし。されど實にさるべき別ある理もなし。されば、亡魂は常に墓所に永く留まりて、墓所より靈異を現はせる事跡多く、又時として大虚をかけめぐり、何れの地にも物せるためし、少なからず。

四

以上説く所によりて、我が國古代奈良朝時代に至るまでの靈魂の本體の如何を知ることを得べし。更に之を概括する時は略次に示す所の如し。

附錄 我邦上古の靈魂觀

- 一 靈魂は氣息の如きものなり。
 - 二 靈魂は靈能ある物質的のものなり。
 - 三 靈魂は神より授けらるるものなり。
 - 四 靈魂には尊卑大小の程度あり。
 - 五 靈魂には荒御魂和御魂あり。
 - 六 靈魂は不滅なり。(又來世なしとするあり)
 - 七 靈魂は分離するものなり。
 - 八 靈魂は肉體の死後、現世に留まり、又天上に上り、黄泉國に行く。
 - 九 靈魂は動物に化す。
 - 十 靈魂は輪廻轉生す。
 - 十一 靈魂は、人の言葉にも存す。
- 之を他の民族の靈魂思想に比するに、甚だ相似たるを認むべし。

素人宗教觀終

明治四十二年十月四日印刷
明治四十二年十月十日發行

素人宗教觀與付

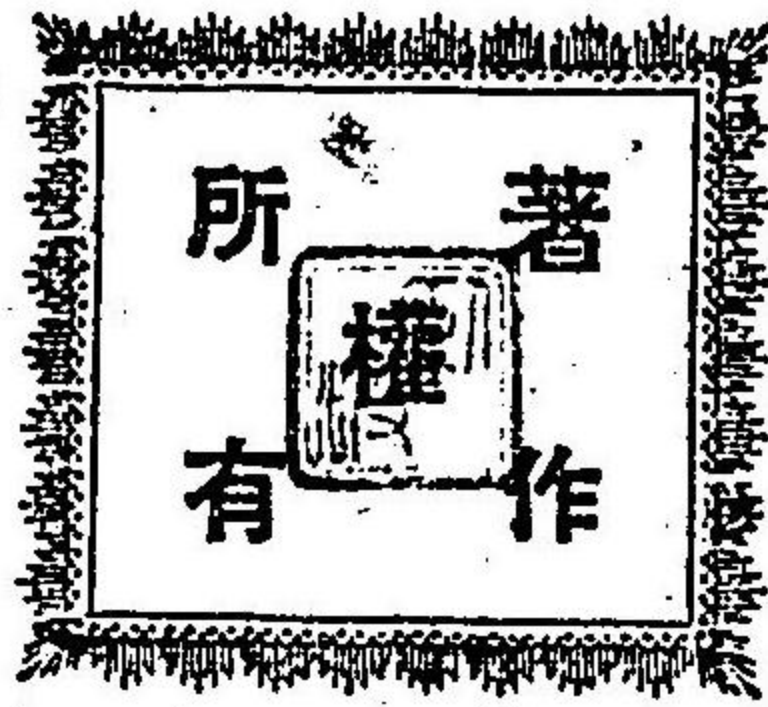
正價金五拾錢

著作者 石橋臥波

發行者 吉野くめ
東京市日本橋區十軒店八番地

印刷者 岩村俊二
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場



發行所

東京日本橋區十軒店
振替口座第一〇七番

裳華房

邦本
界術學
著大の前空

◀ 告 廣

ル ト ク ド 華 裳 ▶
游 川 士 富
著 生 先

我國に醫學史なし、之あるは本書を以て嚆矢とす、該書は醫學史專攻の大家ドクトル富士川先生が十有餘年の、考覈究鑽を経て、今や完成せられたるもの、敢て絶後と云はざるも確かに空前の大著たり、醫學に關係あるの士は論なく、我が文化史、社會史を研究せんと欲する者は、必ず一本を架上に供へざる可からず……(細詳目録参照)

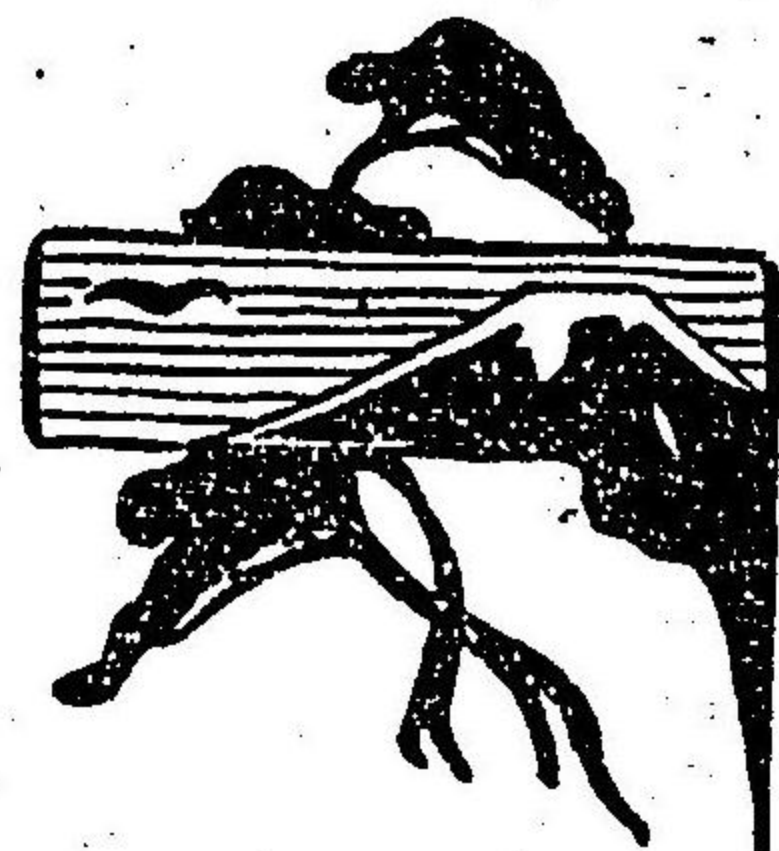
日本醫學史

全壹冊

* 價 定 *
錢拾五圓四金
* 料 包 小 *
錢四拾貳金

男爵 醫學博士 石黑忠惠先生
醫學博士 三宅秀先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 森林太郎先生
文學博士 吳秀三先生
醫學博士 河内全節先生
序 文

菊判洋装箱入美本
全頁數千貳百餘頁
アイノト 圖版數葉挿入
本文圖畫百余個挿入



高楠文學博士 常光得然君 編著 佛陀家庭訓

四六判美本
正價金參拾錢
郵送料金六錢

容内の書本

八千餘卷を以て數へらるゝ大藏經、何ぞ深奥艱澁なる哲理を説ける者のみならん、實踐上の實訓として朝夕修養の料とすべきもの亦極めて多けれども、其經典漢譯の儘にて普通人には解し難きが爲め、實際の用を爲さざるは遺憾の極みならずや、常光氏茲に見る所あり、大藏經の中より家庭の實訓とすべき經典を撰びて和譯せられたるもの、即ち本書なり、編を分つこと四。第一編家庭の部には、尸迦維越六方禮經・父母恩重經・佛說夫婦經・佛說誨子經を。第二編道徳の部には、佛說分別善惡所起經・佛遺教經・四十二章經を。第三編衛生の部には、佛說佛醫經・迦葉仙人說醫女人經を收め、附するに家事作法・看病法を以てす、譯文平易にして解し易く、宛も佛陀の聖容に接して、親しく説法を聴くの思あり、家庭の實訓として朝夕諷誦に資すべし。

發 兌 元 東京日本橋十軒店 裳 華 房

◀ 告 廣 刊 發 書 叢 術 學 通 普 ▶

Flowers



全 壹 冊
 菊判洋裝美製本
 正價壹圓五拾錢
 小包料金拾貳錢

農 學 士 川 瀧 彌 先 著
 農 學 士 川 森 廣 著

各大家執筆着色圖畫
 十數葉外說明木版挿入
 著者身を科學界に委ね旁ら文學を嗜
 み、久しく此缺陷を補ふに意あり、
 拮据數年漸く本書を成せり、敢て花
 の美と巧とを説き盡くし、造花の靈
 機を穿了すると云はざるも、庶くは
 文學と科學との調和之に由て啓かる
 べからんか、圖書の巧印刷製本の美、
 書中の文字と相輝映するに至ては、
 必ずしも茲に縷述せず。

好評増訂第五版印行中

師講學大科理學大國帝京東

著 生 先 藏 直 戸 一 士 學 理

Moon



全 壹 冊
 菊判洋裝美本
 正價金壹圓也
 小包料金八錢

口繪(月世界より地球を見たる圖)
 其他寫真版十葉挿入
 本書は天地開闢の想像説より月が現
 今に至れるまでの、歴史を通觀し現
 在吾人が望觀する、月世界に科學的
 探檢を試み、其新奇なる現象を解説
 し、之に配合するに文學的趣味を以
 てし、且近世の研究に基き、地球と
 月との未來の物語たものである、一
 讀して月の清色を掬せよ。

最新刊好評噴々

◀ 告 廣 刊 發 書 叢 術 學 通 普 ▶

Demon



全 壹 冊
 菊判洋裝美本
 正價金壹圓也
 郵送料金八錢

理 學 士 博 學 士 坪 富 井 正 五 郎 先 生 著
 人 性 主 幹 石 橋 川 臥 波 先 生 著

口繪(羅生門の鬼)極彩色木版圖
 其他 鬼の寫真十數葉挿入
 鬼とは如何なるものを形あるかと思
 へば無きが如く、無さかと思へば繪
 圖彫刻に表はされ、詩歌に歌はれ、
 今も猶人心の奥に潜みて、婦女子の
 畏怖する所と爲る、鬼は果して實在
 するものなるか。本書は此怪物の歴
 史を研究し、其本態を明にせる最趣
 味ある珍書にして奇險不可思議なる
 鬼の面目紙上に活躍す。

最新刊好評噴々

Stars



全 壹 冊
 菊判洋裝美本
 正 價 未 定
 郵 稅 未 定

師講學大科理學大國帝京東
 著 生 先 藏 直 戸 一 士 學 理

精功圖畫數十個挿入
 昔時カルテアの牧人等の目に映じた
 る星の世界の現今の科學的眼光で觀
 たら如何なるものでせうか?本書は
 其疑問に充分なる解答を與ふべく著
 されたるものにて幾千の星の世界に
 關する學理を通俗にし、文學と觸れ
 た星座を紹介したものである、世の
 塵に汚れた思想を天界に清めようと
 する人は是非とも一讀せねばならぬ

近 日 發 刊

(2611)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 蒙 ▶

東京市御編纂	根來可敏君著	志賀重昂先生校閱	賴杏坪先生編纂	栗本秀二郎君校訂	栗本秀雲先生遺著	吳醫學博士校訂	三浦千春大人遺著	井上文學博士序	上村觀光君著	渡邊國武先生序	新渡戶法農學博士閣	農學士菅菊太郎君著	醫學界六大家序	富士川遊君著	長田偶得君編纂
東京案內再版	地理辭典初版	藝藩通志初版	稿遺稿再版	菟庵遺稿再版	菟園遺稿初版	菟園遺稿初版	五山文學全集初版	五山文學小史再版	五山文學小史再版	日歐交通起源史再版	日本醫學史初版	德川三百年史初版	德川三百年史初版	德川三百年史初版	德川三百年史初版
全貳冊	全壹冊	全四冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全五冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全三冊	全三冊	全三冊	全三冊
小包郵稅金四圓五拾錢	小包郵稅金八錢	小包郵稅金參拾六錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢	小包郵稅金四圓貳拾錢

(五の四)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 蒙 ▶

鈴木天眼君著	長田偶得君著	長田偶得君著	高楠文學博士閣	常光得然君著	故勝海舟先生題字	故華房編輯部編纂	故福羽美靜翁題言	志賀直道先生序	二宮尊親君著	吉田宇之助君著	富田高慶翁著	松方正義侯題字	吉田宇之助君著
清正公再版	時代の面影新刊	佛陀家庭訓初版	座右之銘初版	座右之銘再版	續座右之銘再版	報德分度論四版	報德要論再版	德論初版	民記改版	民記改版	民記改版	民記改版	民記改版
全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊
小包郵稅金八錢	小包郵稅金五拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢	小包郵稅金四拾錢

(五の九)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

岡野知十君著	俳趣	再版	全壹冊	郵送料	金貳拾五錢
島崎柳塢君著	かぶら	初版	全壹冊	郵送料	金貳拾五錢
他島崎柳塢君著	商人文學	初版	全壹冊	郵送料	金五拾六錢
マスタートオプアーツ	日本近世政治思想	初版	全壹冊	小包郵稅	金八拾錢
河上清君著	文貧兒之機會	初版	全壹冊	小包郵稅	金八拾錢
ハプアイトン原著	昆蟲採集日記	初版	全壹冊	郵送料	金貳拾錢
石田昌人君著	花	再版	全壹冊	郵送料	金四拾錢
三瀬真若君著	薔薇の栽培	初版	全壹冊	小包郵稅	金四拾五錢
飯田雄太郎君著	小鳥と金魚	初版	全壹冊	郵送料	金貳拾五錢
安藤紫陽君著	素人宗教觀	近日發刊	定價	未定	
石橋學會主筆	素人宗教觀	近日發刊	定價	未定	

(ろの七)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

石橋龍子先生著	形貌學講義	初版	全壹冊	小包郵稅	金七拾錢
播磨龍子先生著	性相學精義	再版	全壹冊	小包郵稅	金八拾錢
石橋龍子先生講說	性相眼正續	初版	全貳冊	郵送料	各貳拾錢
大澤醫學博士校閱	人體內臟圖	初版	全壹冊	小包郵稅	金參圓五拾錢
富士川遊先生主幹	人性第一卷	合本	全壹冊	小包郵稅	金拾貳錢
富士川遊先生主幹	人性第二卷	合本	全壹冊	小包郵稅	金拾貳錢
富士川遊先生主幹	人性第三卷	合本	全壹冊	小包郵稅	金拾貳錢
富士川遊先生主幹	人性第四卷	合本	全壹冊	小包郵稅	金拾貳錢

(ろの七)

◎詳細圖書目錄あり御望の方は往復端書にて申込次第送呈◎

◎人性内容を御覽の御方は郵券二錢封入申込次第送呈◎

故松平勝海舟伯序
直亮伯序
田邊蓮舟先生序
長田偶得君編纂

(上卷近日發行)

徳川三百年史

菊版洋裝美本全三册
全紙數五千五百册
正價金拾四圓五拾錢
各肖像圖版挿入

上卷

正價金四圓五拾錢
郵送料未定

中卷

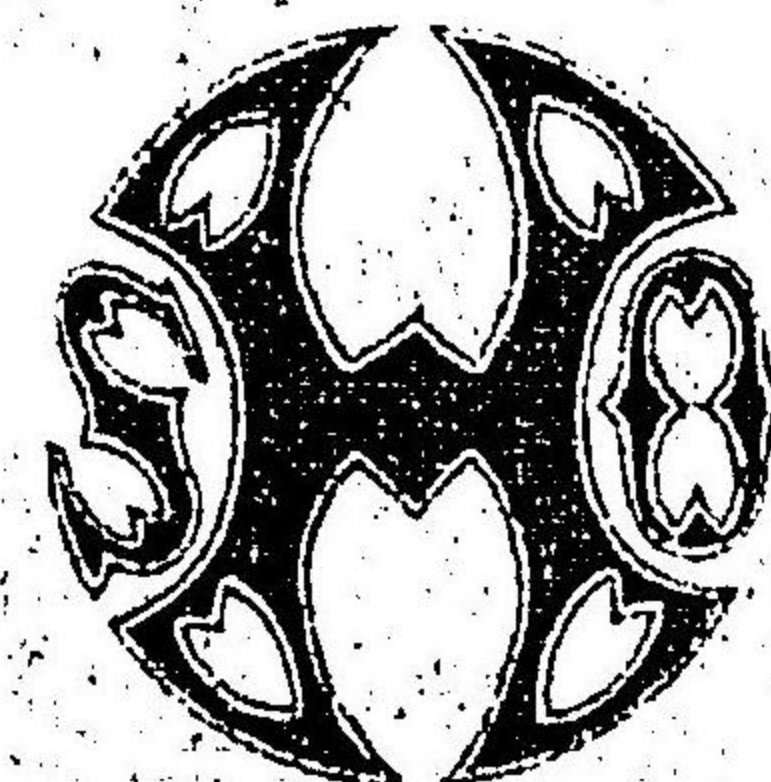
正價金五圓五拾錢
小包料金貳拾八錢

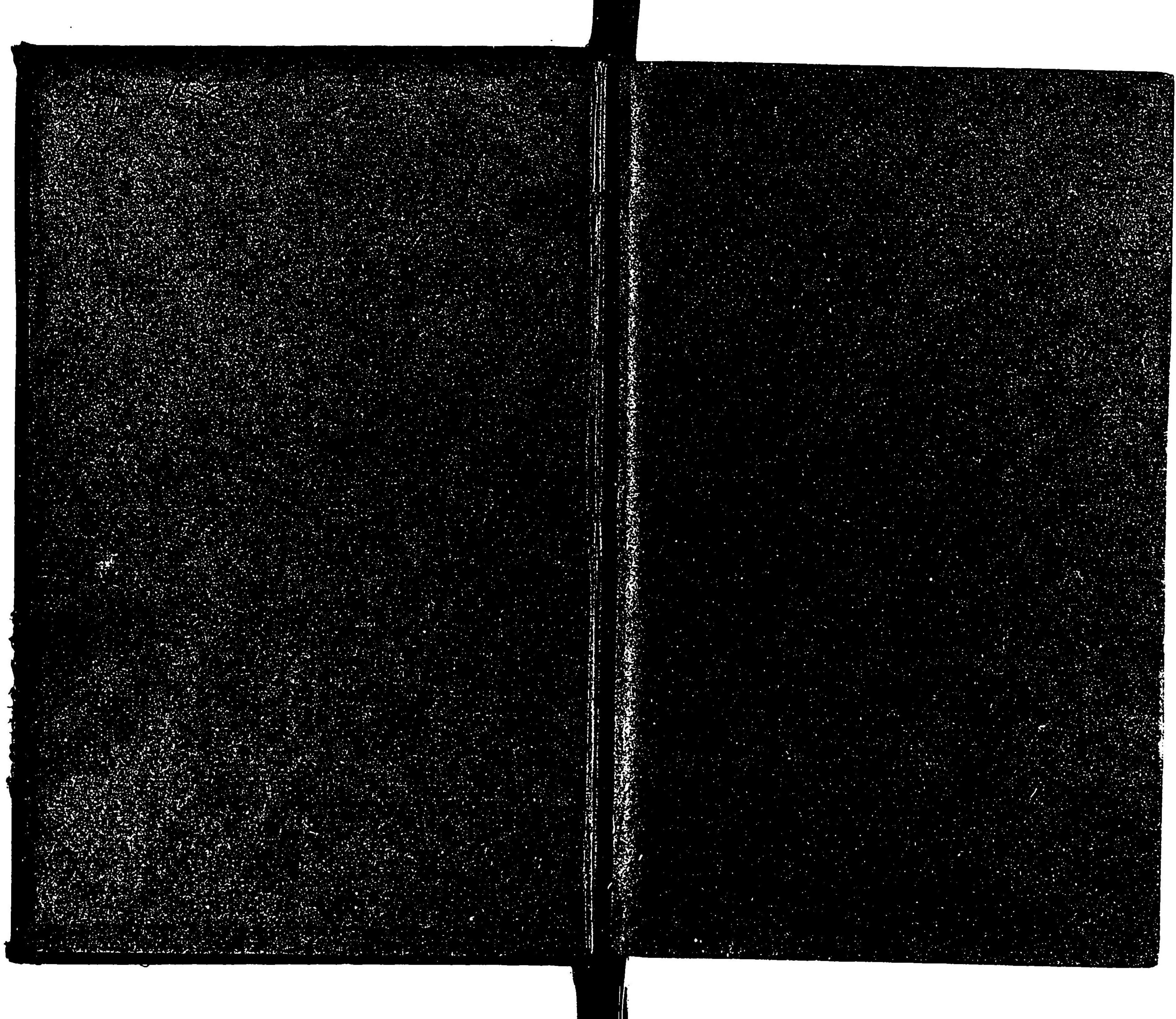
下卷

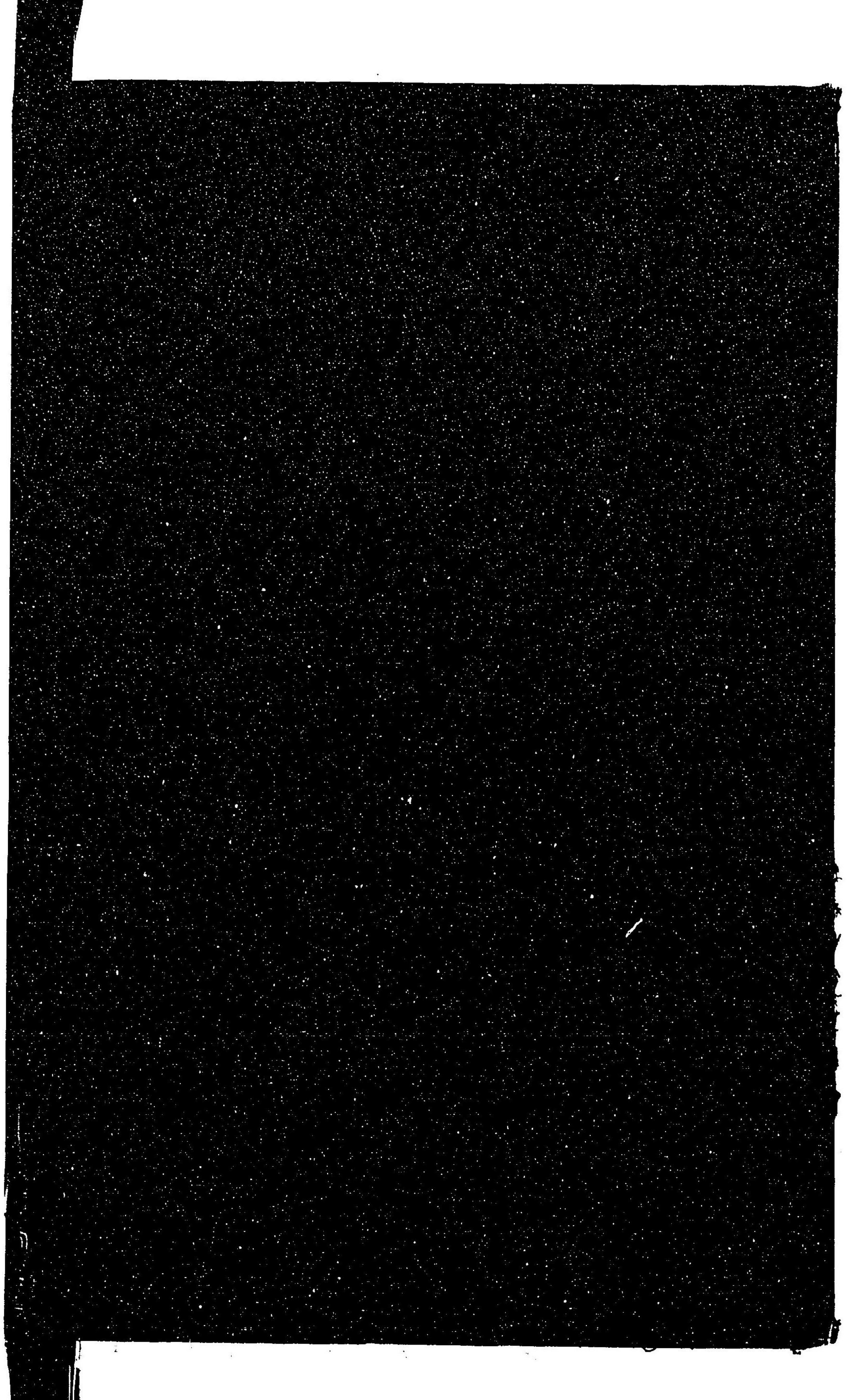
正價四圓五拾錢
小包料貳拾四錢

本書收載する所の人物八十餘名分ちて五大門部となし第一門には徳川家康以下、時代活動の中心たりし政治家を收め以て本紀となし第二門には伊達政宗、水戸光圀以下の諸賢候を收め、第三門には藤原惺窩、中江藤樹、伊藤仁齋、本居宣長、佐藤信淵以下の思想界に勢力ありし碩學鴻儒を收め、第四門には文學者美術工藝家其他名僧等を收む、第五門には言行俊邁、當時を傾動し後人の觀感に資すべき者を收む、巻首に附載するに詳細なる年表を以てす、合して之を見れば精密なる徳川史なり、分ちて之を讀めば趣味多き偉人の傳記なり、三百年間に於ける名君賢相、碩學鴻儒、義人烈士の偉觸に興感し、兼ねて政教文化の得失と思想風尚の變遷とを詳かにし、今日文化の淵源する所を知らんと欲する者は須らく書架の珍と爲すべし。

324
152







324
152

013664-000-0

324-152

素人宗教觀

石橋 臥波/著

M42

ABA-0133



